

オールインワン通信

2019
Vol. 2

猫にみられる消化管内寄生虫「猫回虫」・「瓜実条虫」

猫の消化管内寄生虫には様々な種類がありますが、日本で最も一般的に感染がみられるのは猫回虫と瓜実条虫(犬条虫)です。

猫回虫

猫回虫の感染経路には経口感染、経乳感染、待機宿主の捕食の3つのルートがあります。経口感染の場合、幼虫が気管型移行または全身型移行をします。犬回虫の場合、どちらの移行をするかは犬の年齢に依存しますが(年齢抵抗性)、猫回虫の場合は年齢抵抗性は認められていませんので、猫の年齢に関係なく気管型移行または全身型移行をします。

気管型移行	※1 成熟卵を経口摂取 ▶ 小腸 ▶ 肝臓 ▶ 肺 ▶ 気管 ▶ 食道 ▶ 胃 ▶ 小腸
全身型移行	成熟卵を経口摂取 ▶ 小腸 ▶ 肝臓 ▶ 肺 ▶ 心臓 ▶ 筋肉や臓器へ被囊

気管型移行では肺で第4期幼虫へ、小腸で第5期幼虫から成虫へと発育し、感染から約2カ月で成熟し、産卵を開始します。全身型移行では第3期幼虫のまま全身の筋肉や臓器で被囊します。この被囊幼虫を保有する雌猫が妊娠すると、幼虫が再活性化し、乳汁中へ移行、新生猫へ感染します。この場合、気管型移行を行った一部の幼虫が成虫へと発育し、感染後約5週間で成熟、産卵を開始します。

3つ目のルートである待機宿主の捕食は猫の習性により、犬回虫のそのルートに比べ重要な感染ルートと考えられています。ネズミや鳥、ミミズ以外にゴキブリなどの昆虫も待機宿主になります。待機宿主を捕食した場合は体内移行せずに、小腸でそのまま成虫へと発育します。猫回虫の感染がみられた場合にはこれらの感染経路のプレバテント・ペリオド※2と移行幼虫、感染の程度(重度・軽度)、使用する薬剤(移行幼虫への効果の有無、経口・経皮などの投与ルート等)などを総合的に考え、プログラムを組んで駆除を行い、同時に環境対策も行うことが必要です。

※1: 猫回虫の虫卵内に第3期幼虫が形成され、感染力をもった虫卵
 ※2: 寄生虫が終宿主に感染後、次世代を排出し始めるまでの期間
 参考: 「動物看護のための小動物寄生虫学」、「犬・猫・エキゾチックペットの寄生虫ビジュアルガイド」

■ 猫回虫と犬回虫の比較

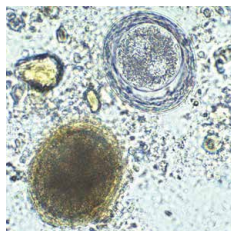
	猫回虫	犬回虫
虫卵の大きさ	65~75μm	75~80μm
成虫の体長	3~12cm	4~10cm
感染経路	経口感染・経乳感染・待機宿主の捕食	経口感染・胎盤感染・経乳感染・待機宿主の捕食
年齢抵抗性	なし	あり

■ プレバテント・ペリオドの比較

	猫回虫	犬回虫
経口感染	約2カ月	約4週間
胎盤感染	—	5~6週間
経乳感染	約5週間	3~4週間
待機宿主の捕食	約1カ月~	約1カ月~



猫回虫の成虫



回虫卵(左下は未成熟卵、右上は成熟卵)

瓜実条虫

瓜実条虫は円葉条虫類に属し、1種の間宿主を必要とします。成虫は扁平で、100以上の片節が連なり一団を形成します。猫の腸管に寄生し、頭節にある吸盤や顎嘴、鉤で宿主の粘膜に付着していますので、多数寄生においては腸炎がみられることがあります。

体表は人の消化管粘膜面をひっくり返したような構造になっていて、栄養成分を直接体表から効率よく吸収できます。頭節側の片節から新しい片節が新生されるため、同じ個体であっても先端部から末端部で片節の成熟度に差があり、頭部側から順に未成熟片節、成熟片節、老熟片節と生殖器の発育の程度で分けられます。

老熟片節にはたくさんの虫卵が含まれていて、瓜実条虫には産卵孔がないため、老熟片節を切り離し外界へ排出します。中間宿主はノミであるため、感染がみられた場合には駆虫と同時にノミの駆除を行うことが再感染と人への被害を防止するために重要です。

ノミの幼虫が瓜実条虫の虫卵を摂取することでノミが瓜実条虫に感染しますので、室内がノミの卵や幼虫、蛹に汚染されている場合には室内を浄化する対策も行います。瓜実条虫のプレバテント・ペリオドは約2週間なので、投薬後2週間未満に老熟片節の排出が止まったかどうか等の効果確認をすることで薬剤の効果や再感染の有無を検討できます。



瓜実条虫の成虫

猫回虫も瓜実条虫も感染のみられる猫の感染状況や飼養環境を考慮した駆除プログラムと適切な環境対策を行いましょう。

フィラリア症予防シーズンになりましたが、ノミも活発に繁殖するシーズンです。フィラリア症予防と消化管内線虫駆除だけでなく、ノミや瓜実条虫の駆除も一緒に行うことで猫や人への感染リスクを低減させましょう。



ブロードライン® 登録商標